

人類よ起ち上がれ!

ムーンマトリックス

[覚醒篇②] *Human Race Get Off Your Knees*
David Icke

血筋のウェブ(蜘蛛の巣)

「ユダヤ」ではない「ロスチャイルド・シオニスト」だ

デーヴィッド・アイク
為 清勝彦 訳

地球の統括者ロスチャイルドでさえ、
その奥にいる宇宙存在に操られている手駒に過ぎない!
奴らは一体何者なのか!?
そしてその宇宙的な支配の手口とは!?
魔的神々の前哨基地、「月」へ
——われわれはついに奴らの尻尾を捕まえるのだ!!



SALONIA



008

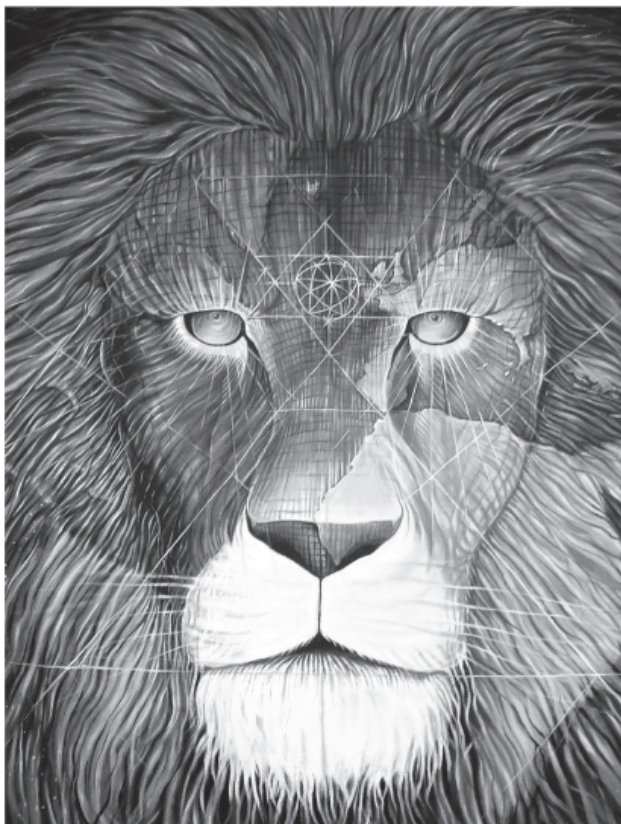
ムーンマトリックス「覚醒篇②」

デーヴィッド・アイク
訳 為 清 勝 彦

ヒカルランド

SAMPLE

いよいよ待望の覚醒第2弾!



The lion sleeps no more.

各巻の構成

【第1巻】我々は通常、自分の身体やものの考え方、自分の名前などをもって「自分」と思っているが、実はそれは錯覚であるということ（第1章）、そして、アイクが1990年に覚醒の旅を始めるまでに辿った人生経験の必然性（第2章）、覚醒の旅を始めて以降、世間から大々的に嘲笑ちやうしやうされることで真の自由を得たこと（第3章）が記述されている。

【第2巻】第4章より、アイクが過去に行ってきた真実の解明の内容が、解明を行った順に（解明に導かれた順に）紹介してある。太古の「黄金の時代」の終焉をもたらした地殻変動（大洪水）の後にメソポタミアの地に出現したシュメール文明。それが、バビロン、エジプト、ローマ、ロンドン（バビロンドン）と変遷し、今日の世界支配ネットワークになった（第4章）。イルミナティの地球規模の蜘蛛くもの巣（ウェブ）、ピラミッド支配構造（第5章）。イルミナティの血筋の中核をなすロスチャイルド家とその金融支配の窓口（第6章）。「ユダヤの陰謀」と言われるが、ユダヤ人はスケープゴートに過ぎない。陰謀を巡らしているのはロスチャイルド・シオニストである（第7章）。

【第3巻】人類支配の基本テクニクである①PRS（問題を作る↓人々に反応させる↓支

配に都合のよい解決策を実施)、②全体主義者の忍び足について、9・11事件、地球温暖化詐欺などをケーススタディにして解説(第8章、第9章)。

【第4巻】人間の基本的な行動や感情を支配する爬虫類脳。現在の人類は爬虫類人の遺伝子操作によって創造された(第10章)。世界各地の古代神話・伝説・信仰に共通する蛇崇拜は、現在の悪魔崇拜やさまざまなシンボルとなって受け継がれている(第11章)。

【第5巻】言語に暗号化されている蛇の人類支配を言語学の視点で分析(第12章)。爬虫類人はどこに居るのか?(地下世界、変身のことなど)(第13章)。月は、自然の天体ではなく、工作された宇宙船である可能性を検証(第14章)。

【第6巻】アマゾンの熱帯雨林で聞こえた「声」のメッセージ。愛だけが真実であり、他は何もかも錯覚だった(第15章)。人体をコンピュータにたとえ、宇宙をインターネットにたとえるアイクの宇宙論(第16、17章)。時間と空間という錯覚(第18章)。

【第7巻】月のマトリックス。月からの人類支配の仕組み(第19章)。

【第8巻】ゲーム・プランⅠ人口削減と心身への攻撃(第20～22章)。

【第9巻】ゲーム・プランⅡ世界政府と自由の剝奪(第23～25章)。

【第10巻】ゲーム・プランⅢ社会福祉の正体(第26～28章)と結び。

(第2巻よえがき)

1952年、デーヴィッド・アイクは、イングランドの貧困家庭に生まれた。退屈な授業の学校で唯一の活路として見出したサッカーの道。だが、せっかく手に入れたプロ・サッカー選手の地位も、あっけなく関節炎で失ってしまう。

いくつもの「偶然」でBBCテレビのスポーツ解説者になったが、その仕事も「偶然」にワイト島で行われた人头税の初審問事件をきっかけに失ってしまう。ワイト島で英国緑の党の支部を結成したアイクは、やはり「偶然」によって緑の党が世間の一躍脚光を浴びる直前に党の全国スポークスマンとなる。だが、緑の党が既存の主要政党と同じピラミッドの一部に過ぎないことに気付くまで、それほど長くはかからなかった。

霊能者を介して得たメッセージ、ペルーでのクンダリーニ覚醒を通じ、1990年、ついにアイクは真実に覚醒する旅を始める。彼は「正気を取り戻す」経験をしていただけだったが、人々はそれを「狂気」と嘲笑した。

覚醒に至るアイクの人生の「経験」を二つの観点



メソポタミア（シュメール、バビロニア）とインダス、エジプト文明は単一の帝国だった。シュメール人はハザール帝国に移住し、さらに欧州で「ユダヤ人」となった。これが血筋の故郷だ。

が眺めていた。

一つは、人間としての通常の観点、マインド心を通じた認識。

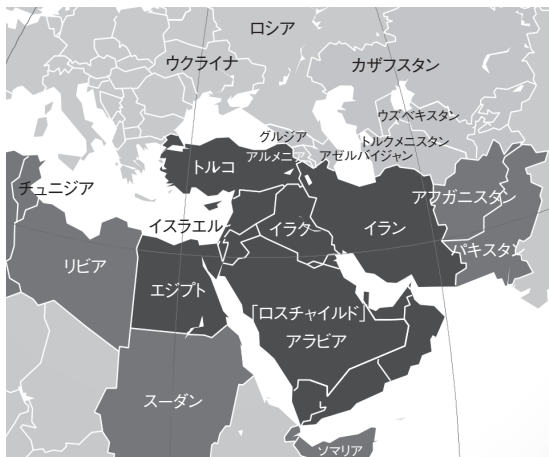
もう一つは、コンシヤスネス根源の意識を通じた認識だった。マインド

心は驚き、嘆き、悲しみ、絶望していたが、根源意識はいつも大丈夫だと言っていた。全ては必然だと知っていた。

我々は全て知っている。
忘れていただけだ。

この第2巻より、アイクの真実の解明の旅の成果が順を追って説明されている。

最初にアイクの関心を引き付けたのは、チグリス川とユーフラテス川に挟まれた地域、メソポタミア（シュメール）だった。アトランティス文明を終焉させた大洪水（地殻変動）を生き延びた血筋が、メソポタミア（シュメール、バビロン）、ハザール帝国（カスピ海と黒海に挟まれた地域）、ヨーロッパの「ユダヤ人」として継続し、今もなお、世界を背後から操っている。そして、「ロスチャイルドのシオニスト」（イスラエル）となった彼らは、まさに今、彼らの縁ゆかりの地で世界大戦を展開している。



現在、ハードパワー（軍事力）とソフトパワー（民主主義・人権）の両面でペンタゴンの拡大中東プロジェクトが展開中の地域。

第2巻 まえがき 6

第4章

「手がかりを追っていけばよいだけだ……」

——操作者の「血筋」はシュメール、バビロンへとさかのぼる！

この世界最大の謎は、シンクロニシテイ共時性に導かれて解明される！ 18

アトランティスとムー（レムリア）の「黄金の時代」 22

地殻大変動と「人間の墮落」で滅亡した「クリタ・ユガ」ヘシオトスも描いた「楽園」時代 26

明日かもしれない——黄金の時代が滅び、石器時代へ転落！ 33

発明・発見は全て再発明・再発見
原始人は天才だった証拠がなぜ次々と発見されているのか!? 35

大洪水後の世界——全ての道はシユメールに通ず！
再発した高度文明の一つ 41

同一の知識、異なる経路——未来などなく、あるのは今の瞬間の可能性 46

血筋エリート（ブラッドライン）——過去6000年間人類の方向付けをしてきた者たち！
地球規模の「ビッグブラザー」国家を作る 52

地球規模になったバビロンドン（ローマとロンドン）
キリスト教版面パチカン 大英金銀帝国 59

邪悪な秘密結社を操る血筋アトランテイスとムーの黒魔術師 61

本当の知識は血筋だけが独占、下フリーメイソン、キリスト教団以下々には知らせず 65

姿を隠した独裁権力——鉄格子なき監獄アメリカで自由を満喫マンキ 69

第5章 「どうぞ家にお上がりください」と蠅を誘う蜘蛛 ——蜘蛛の最も重要な執行部隊はロスチャイルド！

イルミナティのネットワークは巨大な蜘蛛の巣ウェブ——どこからでもからめ取る 76

イルミナテイの重要組織「フエビアン協会」の手口は「全体主義の忍び足」
羊の皮を着た狼 トリタリアン・テイフット

84

フエビアン・イルミナテイの直営大学LSE(ロンドン大学政経学部)
卒業生にテロウアド・ロフクアエラー、ジョージ・ワロス、リチャード・パー

88

ジョージ・オーウェルの『1984年』も
オルダス・ハクスリーの『すばらしい世界』はイルミナテイの内部リーク情報

92

地球独裁——ピラミッドの中にピラミッドがある入れ子構造
人は自分が属する階級のピラミッド(穴)しか知らない。全体像を知れる由もない。

94

超国家EUは「ヨーロッパ・ファシスト・共産主義国家」
スーパーステイト

101

イルミナテイ純血種ハプスブルグ家がEU創設
サラブレッド

106

「反ヨーロッパ人」を冷凍するEUは、予算の1割を毎年、詐欺・不正で消費

108

「欧州憲法」反対のフランス、オランダを「リスボン条約」で離脱。「リスボン条約」反対のアイチランドも、二階目の国民投票でひっくり返す

110

「連合」のネットワーク——情筋の看板男オバマ教がやりたなかきつ地ていること！
球 脱 模 の 独 裁 体 制

112

「自由」貿易とは、搾取・濫用の自由

119

長年の計画——福生学者リチャード・テイ博士の地球監獄国家構築の悪魔的提言が日々、着々と実現中
ジョージ・オーウェルとオルダス・ハクスリーの本の先を見よ！

120

新世界システムに順応できない人間は、「人道的に処分」される
人々は簡単に消える！

126

スバイダーマンたち

第6章 —— 「ユダヤ人という発明」を押し進め、利用し尽くすシオニスト

ハザール人の正体

モルガン、カーネギー、ハリマンも
地球規模の犯罪者、権力欲に任じた大量虐殺マニア
ロックフェラーも配下 —— ロスチャイルド家という血筋も「蜘蛛」の代理人 130

ロスチャイルドがユダヤ人 —— 最も残酷な作り話、実はシユメール人！ 134

聖書記述の「登場人物」、イスラエル王国は、全て捏造 135

シユメール・ハザール由来のマジヤール人、フン人、イデイツシユ語、鉤鼻、頭蓋帽
シユメール人、ハザール人
子孫、ヘブライ語とは無縁
スペイン・ポルトガル出身
スカルキヤツフ

支配層のアシユケナジ、二級市民のセフアルデイ、どちらもイスラエルとは無関係 147

「離散ユダヤ人」など
「ユダヤ人の公式の歴史は、ロスチャイルド家が創作した嘘」
自分が「ユダヤ人」でないことを知っている

六芒星は、「赤い盾」ロスチャイルド家のシンボルだった 156

ソ連・アメリカ・ナチス・FRB・CFR・黒人運動、全て操るロスチャイルド 159

とにかくマナーだ——世界の富（生命エネルギー）が血筋家系に流れ込むシステム黒魔術師が支配するロスチャイルドの目標

164

悪魔の利子つき無から生じるマナー——ロスチャイルド家が享受している窃盗と搾取

169

グリーンバックや銀証券 踏めば殺害（リンカーン、ケネディ）無利子マナーはロスチャイルドの「虎の尾」

172

例産もよし、担保は戦利品だ！好況と不況も意のまま——利子はロスチャイルドの最強兵器

175

ロスチャイルドとイルミナティ家系が国を支配するテスバコン筆棍の「暗黒的アルゴリズム」クニツク

181

無謀にも「毒蛇の巣窟」に戦いを挑んだ血筋の金融システムアンドリユー・ジャクソン大統領

186

悪魔の臭い——奴隷解放を唱えながら世界中の奴隷ネットワークを支配そこには必ずロスチャイルドの影がある！

188

第7章 シオンのメインフレーム（巨大コンピュータ）

——ユダヤ人とは関係ない！ ロスチャイルドのシオニズムなのだ!!

ロスチャイルドは「シ「聖書」はパピロニア・タルムードとカバラオニズム」でユダヤ人を詐称し、搾取

194

ユダヤ人を撲滅するロスチャイルド、サバタイ・ツヴィ、ヤコブ・フランク

198

バイスラエル建 国乗っ取り画策の英外相バルフォア卿 205

「民族浄化」ベン・グリオン、ベギン、シヤミール、シヤロンテロリストの歴史 代 首 相に資金・武器提供のロスチャイルドイスラエル建 国はあくまで殺 208

標的にされたアラブ人アラブ人を待ち受ける冷酷なシナリオ 212

根本からのアバルトヘイトアラブ人を殺すか追い出す出 す 同情も慈悲もない——ロスチャイルド・シオニズム「大イスラエル」 221

パレスチナの子供たちは逮捕され、暴力尋問、性的虐待も 地球上で最も人種差別が激しい国イスラエル 233

イスラエルを助けパレスチナを搾くアメリカ人一人当たり年500ドル 大 虐 殺税——あなたが収めた税はロスチャイルドが使っている！ 236

ロスチャイルドの所有物オバマははじめマスメディアも 非難・批判せず イスラエルの核兵器保有には、全世界が騒がない、 244

ロスチャイルドのロビーAIPACが完全支配する米 国圧力団体 アメリカ・イスラエル公共問題委員会 右を向いても左を向いてもオゾン派 245

「イスラエルの友」が完全支配する英国労働党・保守党・自由民主党・官 僚 247

サウジアラビアの正体は、「ロスチャイルド・シオニスト」サウダ家の発源はユダヤ商人モルダハイ 252

最大産国の人種差別主義者はロスチャイルド・シオニスト 門番——反ユダヤ主義という欺瞞 256

ADL創設の目的はイスラエルとモサドの悪事暴露を封じるため名義援助禁止同盟 259

「人権マフィア」の「人権」独裁体制ユダヤ人を利用し尽くす 秘密結社 自己憎悪者の中傷——シオニズムは恐怖政治の別名！ 267

ロスチャイルド・シオニストは「ホロコースト」教育もハイジャック！ 274

「ナチス狩り」は、本命ロツクフエラー家、ブツシユ家、「死の天使」は見逃す 281

「良いユダヤ人」はロスチャイルド・シオニストだ！
「自分を憎悪する」悪いユダヤ人」——フインケルスタイン、ノイムチヨムスキー、ヘンリー・メイコウなどレツテルを貼つてイスラエル批判は許さない

虚偽の「イスラム」テロリスト——ほんの一例 ロスチャイルドは何でも創作する！
はんの一例 ロスチャイルドはモサド工作員
テロ 厳重な管理
戦争 競争

「シオン長老の議定書」を「反ユダヤ主義の捏造書」と捏造したアレン・ダレス 288

第4章

「手がかりを追っていけばよいだけだ……」

—— 操作者の「血筋」はシユメール、バビロンへ
とさかのぼる！

いつの時代の人々も、過去の世代より知性が高くなったと想像し、
未来の世代は自分たちよりも愚かになると想定する。

—— ジョージ・オーウェル

この世界最大の謎は、シンクロニシティ共時性に導かれて解明される！

私に訪れた想像を絶する「覚醒」による混乱と戸惑いは、初期段階の解明をもたらし、私は自分自身が本当に想像を絶する旅を始めたことに気付いた。

共時性シンクロニシティ（見かけは偶然の一致）により、私に大きなジグソーパズルの断片ピースを与えてくれる人々、本、資料、経験に導かれた。そして、1992年になると、ジグソーパズルの絵が浮かび上がってきた。最初から私には、大きなテーマとして、チグリスとユーフラテスの「二つの川に挟まれた土地はだ」、メソポタミアと呼ばれる地域があった。この地域は、シュメール、バビロン、カルデア、そして現在ではイラクと、さまざまな呼ばれ方をしてきた。

私は、常に本を読んでシュメールとバビロンに関する記述に注目し、また、霊能者や出会った人々から（簡潔なものが多かったが）話を聞くようにしていた。古代エジプトも意識することが多かった。だが、いったいどんな意味があるのだろうか。もう一つのテーマに、「エリート」の血筋（家系）があった。ジョージ・オーウェルの古典的著作『一九八四年』のビッグブラザーのように中央集権化した地球支配を樹立する目的で、世界の出来事を制御している人々のことである。こうしたことが、どう組み合わさっていくのか？ 何が



図16 メソポタミアの地、特にシュメールとバビロンは、私が覚醒した直後から私のテーマだった。

我々はまさに肉体コンピュータ①

人間の身体が本質的にコンピュータであることを裏付ける事実として、細胞が生物的コンピュータのチップであること、我々の身体にはその細胞が75兆個もあることほど説得力のある事実はない。研究者で医学部の教授だったブルース・リプトンは、『信じることの生物学（The Biology of Belief）』〔邦訳『「思考」のすごい力』PHP 研究所〕という著書に、細胞について研究した内容（特に細胞膜のこと）を書いている。彼は、細胞膜は「門扉と経路を備えた液晶の半導体」であることを発見したが、コンピュータのチップもまた「門扉と経路を備えた液晶の半導体」と定義される。

起きていて、私は何をすればよいのだろうか？ 疑問が続出した。

だが、何週間、何カ月、何年と調べている内に、霧が去り始め、驚きのストーリーが浮上してきた。1990年代の初頭以降、導きを受けながら解明したことを本にしてきたが、特に私の最大の著書『デーヴィッド・アイクの世界陰謀ガイド』（邦訳『恐怖の世界大陰謀（上・下）』三交社）にまとめてある。そのため本書では、過去の著書で述べた情報については、どのようにパズルを組み合わせてきたか経緯が分かる程度に述べることにし、新たなレベルの解明に向けて話題を前進させることに専念したいと思う。

「現実」に関しては特にそうである。「現実」^{リアリティ}とは何か？ 我々は誰なのか？ 我々はどこにいるのか？ いかにして我々の現実認識は操られ、他の人間が望む通りに「世界」を認識するよう条件付けされているのか？ どうすれば、心^{マインド}を打ち破って根源意識^{コンシャスネス}に突入し、この監獄をかつてのような楽園に戻すことができるのか？ 私の著述活動になじみがなく初めて聞く方は、私の言っていることの大半は、素晴らしいことだが不可能だと思ってしまうことだろう。それも理解できる。だが、その不信感は一時的に停止してもらって、諦めずに読んでもらえば、ページを追うごとに、点と点が線につながっていくだろう。世界は、表向きに見えている姿とは、まったく異なる。今まで私の著述に親しんできた方にとっても、驚きの情報が用意してある。

ではこれから、1990年以來、信じられない共時性に導かれて私が解明してきたストーリーを紹介しよう。なるべく私が解明した順序で記述したいと思う。本章では、基本的な事実を概説し、追って詳細部分を付加していくことにする。

アトランティスとムー（レムリア）の「黄金の時代」

地震、火山噴火、津波によって海の底に没していった土地のことは、世界中に無数の神話や伝説となって残っている。高度に発達した文明には、文化圏によって異なる名前がつけられているが、最も有名なのが、アトランティスとムー（レムリア）である。アトランティスは大西洋に、ムーは太平洋に位置していたと言われる。

一部の研究者は、この伝説は失われた惑星のことを伝えており、その残滓が小惑星帯だと主張している。私としては、そうした事実を裏付ける根拠が見られれば、そのような可能性も留保しておきたいが、いずれにしても、地質学的な時間のスケールで比較的最近に、アトランティスやムーの終焉の伝説を残すような地殻の激変があったことは間違いない。この惨事が、世界中の古代の神話や伝説として記録され、地質学や生物学で見られるような痕跡を残した。



図17 アトランティスとムーが存在していたと言われているおおよその位置。

我々はまさに肉体コンピュータ②

リプトンは述べている。

私はさらに真剣に生体膜とシリコンの半導体を比較・対照してみた。そして両者が本質的に同じ定義をされることが偶然ではないことに気づき、しばし驚嘆した。細胞膜は、構造的にも機能的にも、本当にシリコンのチップと同じだった。

電子機器やチップに使用されている半導体の基本的な部品はシリコン結晶であり、それでカリフォルニア州の「シリコン・バレー」とか「シリコン経済」と呼ばれる。科学者は、DNAには、カーボン・ナノチューブに似た、稀有な超伝導特性があることを発見している。DNAと細胞は、まさに肉体コンピュータのハードディスクの部品なのである。

聖書にも「大洪水」の記述があるが、これは聖書よりも古い話に基づいて書かれている。ノアと大洪水の物語は、シュメール（紀元前4000年～紀元前2000年）やバビロン（紀元前2000年～紀元前300年）など古代メソポタミアの諸文明にあった物語を、ほとんど逐語的に繰り返し返したものである。現在のイラクの場所で回収された粘土板にこうした記述があり、聖書よりも何千年も昔に起源がある。そこにギルガメッシュという男が登場するが、これを聖書では「ノア」に差し換えている。メソポタミアのギルガメッシュ叙事詩には、大洪水があったこと、ギルガメッシュは家族と動物を救うために箱舟を作ったこと、洪水が退いたかどうか鳥に視察に行かせたこと、箱舟は最終的に山の上に辿り着いたことなど、どこかで聞いたような話がある。

別の洪水物語もあり、ここでは、「神々」が人間を滅ぼすことを決め、「エンキ」という神が祭司王のジウスドラに洪水が近いことを警告する。大きな船を作り、「獣と鳥」を乗せるように指示する。雨と洪水が終わると、ジウスドラは、太陽の神ウツに感謝して頭を垂れる。古代インドでは「ノア」はマヌと呼ばれ、他にも、名前は異なるが同じような話が、バビロン（ノアがアトラハシスになっている）、カルデア、エジプト、アッシリア、ギリシャ、アルカディア、ローマ、スカンジナビア、ドイツ、リトアニア、トランシルバニア、トルコ、ペルシャ、中国、ニュージーランド、シベリア、ビルマ、朝鮮、台湾、フィリピン、スマト

ラ、イスラム信仰、ケルトの伝承、そして、南北アメリカ大陸、アフリカ、アジア、オーストラリア、太平洋の先住民たちにも語り継がれている。こうした話には、並外れた地球の変動が伝えられている。海を沸騰させるような灼熱^{しゃくねつ}、火を噴く山々、太陽と月の消滅による暗黒、雨のように降り注ぐ血と氷と岩、地球の反転、空の落下、大地の隆起と陥没、大陸の消失、氷河期の到来などだが、ほぼ全ての伝承に、異常な洪水は共通しており、水の壁が地球を一掃したことになっている。

地殻大変動と「人間の墮落」で滅亡した「クリタ・ユガ」

ヘシオドスも描いた楽園時代

古代人は、これが「黄金の時代」を終焉させたと述べており、大変動とそれに次ぐ「人間の墮落」によって黄金の時代が滅びたことが世界中の言い伝えにある。古代ギリシャの詩人ヘシオドスは、この「墮落」以前の世界のことを記している。

人は、神々のように、欠陥も激情もなく、苛立ちも^{いらだ}労苦もなく、生きていた。神聖な存在と仲良くしながら、平穏と喜びの日々を送っていた。お互いの信頼と愛で結ばれ、完全な平等を保ちながらともに生きていた。地球は今よりも美しく、豊かな種類の果実

が自然に生なっていた。人間と動物は同じ言語で話し、互いに（テレパシーで）意思疎通していた。大人は一〇〇歳の少年に過ぎないと考えられていた。加齢による衰弱はなく、上位の生命領域に移るときも、「死というよりも」穏やかな休眠だった。

ヒンドウの伝承には、「ユガ」という時代認識がある。クリタ・ユガは、「世俗の欲望」もなく、病気も恐怖もない黄金時代だった。常に喜びと幸福があったとされ、人々が必要なものは、「心で願うだけで、いつでもどこでも、自ずと大地から生じた」という。その後、楽園は終焉し、次のユガには、聖書が「人間の墮落」と呼ぶものが現れた。恐怖、苦悶くもん、病気、精神的苦痛、物質への執着といった五感の現実である。生存競争に明け暮れ、短命と衰弱が蔓延まんえんした今日の時代の観点からは、クリタ・ユガの世界を想像することは困難であるが、実際にそうだったのであり、再びそんな時代が訪れるのである。

地殻の大変動と、邪悪な勢力の介入により、黄金の時代は終焉を迎えた。おおまかに1万5000〜1万4000年前、1万3000〜1万1000年前、8000〜7000年前の3つの時代に起きた変動を含め、地球には数多くの異常な変動があったことが、地質学・生物学的痕跡となって記録されている。研究者のD・S・アランとJ・B・ドレールは、『地球が死にかけた時（When the Earth Nearly Died）』という優れた著作において、古代の

言い伝えと地質学・生物学的な痕跡を比較検証すると、同じ出来事を伝えていることを示している。多くの人は、ヒマラヤ山脈とか、アルプス山脈、アンデス山脈が、現在の高さになったのが、ほんの1万3000〜1万1000年前頃だとは思ってもよらない。ペルーとボリビアの国境にあるチチカカ湖は、約1万3000フィートの高さにあり、航海可能な湖としては世界で最も高いところにあると言われているが、その辺りの大部分は、1万3000年前には海だった。イギリスで最も有名な歴史ドキュメンタリー制作者のデーヴィッド・アッテンボロが、山岳地帯を取材して、魚など海の生物の化石があるのを紹介していたのを思い出す。魚が山にやってきたのではなく、地質学的な感覚で言えば最近まで、その山々は海の中だったのである。

古代ギリシャの哲学者プラトン（427〜347BC）が、アトランティスとその崩壊について書いているが、その著作『法律』の中で、大洪水が低地を覆った後に、高地で農業が始まったと述べている。植物学者のニコライ・ヴァヴィロフは、世界中から5万件以上の植物を収集して研究し、全ての原産地は、たった8カ所（全て山岳地帯）に絞られると結論を出している。こうした有形の証拠と古代からの伝承を総合すれば、地球が壮大な地殻変動を、一度ではなく何度も、経験したことは、あまりにも明白である。古代の記録に残る規模の津波では、平方インチ当たり2トンの圧力が地表面にかかり、数時間の内に、山岳地帯を形成

我々はまさに肉体コンピュータ③

現在、三進法のコンピュータが開発されており、プラス1と0とマイナス1の3つの値で演算する。インプットに単純に反応する1（電荷あり）か0（電荷なし）かのオン・オフ状態だけでなく、マイナス1という選択肢が加わることで、差し迫った仕事に関連がないと思われる情報を無視することが可能になり、大幅にコンピュータの能力は向上する可能性がある。実は人間の脳も、同じ二進法、三進法のシステムで動いていると聞いても、もう驚くことはないだろう。

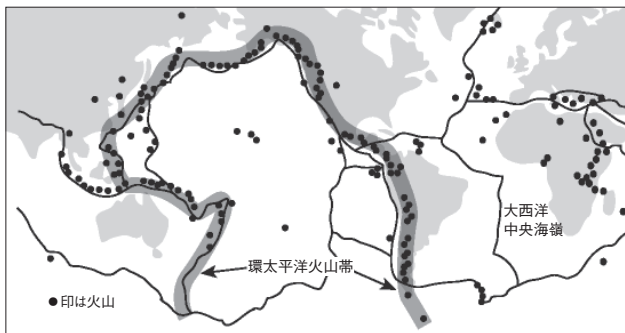


図18 極めて不安定な大西洋中央海嶺は、アトランティスがあったとされる場所を横断している。ムー（レムリア）は、環太平洋火山帯と同じ地域に存在したと言われる。

し、全てを化石にした。これほどの変動であれば、地球の「進化」の時間的な尺度を簡単に狂わせることができただはずだ。今日の人造石も、これと同等の圧力をかけて製造されている。

何らかの壮大な出来事が、ほとんど一瞬の内に、地球の表面を様変わりさせたことを示す証拠が広範に存在する。無傷のまま化石となった木が発見されているが、科学者が言うように時間をかけて化石になったのであれば、木は朽ちてしまう。一瞬で化石になったのでなければ不可能である。瞬間的に氷結した地域もあり、マンモスが食事の姿勢で立ったまま氷に閉じ込められて発見されている。こうした発見は、いずれも、世界各地で伝えられてきた古代の物語の正しさを裏付けている。ところで、私は本書の執筆中に、こうした地質的な惨事が、どのようなように、どんな手段で引き起こされたのか、理解するに至った。その衝撃の内容は後述する。

アトランティスは、大西洋中央海嶺^{かいれい}に位置していたようだ。この海嶺は、4万マイルも続く裂け目の筋の一部であり、4つの大きな地殻プレート（ユーラシア、アフリカ、北米、カリブ海の各プレート）が出会い、衝突している場所である。地質的には極めて不安定な場所で、地震と火山噴火の主な発生源の一つである。ムー（レムリア）は、断層線と「環太平洋火山帯」^{リング・オブ・ファイア}の地質活動に包囲された場所にあったと言われている。

アゾレス諸島などの島はアトランティス大陸の残存部であり、太平洋の島々はムー大陸の

一部だったと言われている。アゾレス諸島とカナリア諸島（鳥のカナリアではなく、犬を意味する「ケイナイン」から名付けられた）は、プラトンがアトランティスの末期とした時期に、広範囲な火山活動の影響を受けていた。プラトンは、その著作、『ティマイオス』と『クリティアス』において、アトランティスの終焉時期を約1万1000年前としているようだ。アゾレス諸島の海底には、地質学的にそれほど古くない時期に変動があった痕跡がある。海水中で1万5000年以内に分解するタキライト溶岩がまだ残っている。他にも、この海域がこの時期に陸地だったことを示す証拠がある。例えば、水深1万5000～1万8440フィートから回収した砂の分析がある。海洋学者のモリス・ユイニングは、『ナショナル・ジオグラフィック』の記事で、「大地が2、3マイル沈没したか、または、現在よりも海が2、3マイル低かったか、どっちかだ。いずれにしても、驚異的な結論だ」と述べている。

地質学・生物学的な痕跡によると、今日のアゾレス諸島周辺の土地を沈没させた火山活動は、現在のヨーロッパ、北アメリカ、アイスランド、グリーンランドを結んでいた「アパラチア」という陸塊りくかいの分裂・沈没のあった時期と一致する。沈没の深さまで密接に相關している。アトランティスがあったと想定される地域に関する痕跡は、元のムー大陸や太平洋でも発見されている。バミューダ、フロリダ南部、プエルトリコに挟まれたバミューダ三角海域トライアングル

については、長年議論されてきたが、この海域は、しばしばアトランティスに関連があるとされてきた。海没した建物、壁、道路、ストーン・サークル、さらにピラミッド群らしきものまでが、三角海域内のビミニ島付近のバハマ堆たいの水中で発見されたことで、この憶測おくそくはさらに加熱した。壁や道が交差する線を描いているのも発見されている。実に世界中で、沈没した都市や構造物が見つかっている。

明日かもしれない——黄金の時代が減び、石器時代へ転落！

この地球上に「知的生命体」（としばしば誤って言われるもの）が登場したのは、一般の科学が信じているよりも、ずっと昔である。これを示す証拠が多く発見されているが、既存の科学の権威は、単純にこれを無視して、公式版の人類史を守り通している。「大洪水」の前の世界は、現在よりも遥かに発達した技術を持つ「黄金時代」の地球社会だった。「時間」の経過とともに技術が進歩するという常識からすると、奇抜な話かもしれない。我々は、暗黙の内に、人類の発展の「先端」にいたいと思いませんか？

世界各地の文明の遺跡を見ると、その当時にしては相当に進んだ技術があったことが分かっている。かつてエジプトにあった信じられないような文明と今日のエジプトを比較してみ

るとよい。シュメール（イラク）もそうだ。インカ帝国と比べて今日の南米はどうだろうか？ 他にも世界中に同様の例はいくらでもある。要するに、人間の「文明」や知識は、時代とともに進化することもあれば、退化することもあるということだ。

「黄金の時代」を減じた激しい変動が、今日の地球社会に発生したらどうなるか、想像してみるとよいだろう。一瞬の内に、程度の差はあれ、原始的な社会になってしまおうだろう。現在の世界から電気がなくなったら、どんな生活になるか考えてみるとよい。ニューオーリンズをハリケーン「カトリーナ」が襲ったとき、どうなったか？ 他にもそんな自然災害の例はいくらでもある。ハイチ地震のような地震が発生した後の荒廃した状態を想像してみよう。そんな地震が世界的な規模で発生すれば救援活動も期待できないが、そうするとどんな生活になるだろうか？ 食うか食われるかの世界、自分のことだけで精一杯の状態、自分の食糧・安全・住居は自分で見つける生活、自由競争の無法状態だ。その後、何千年も経つ内に、現在我々が持っている技術の情報も損なわれ、急速に失われていくだろう。そして、神話や伝説の中だけに保存される状態となり、それも次第に狂った話、想像上の作り話だと思われるようになっていくようになるだろう。多くの人々は日常と比べてあまりにも奇抜なので、現在のような世界が存在したとは信じなくなるだろう。

我々には、「我々にできないことはありえない」と考える癖があり、かつては宇宙旅行と

いう考えも嘲笑ちやうしやうされたものである。地殻変動後の社会の公式な歴史は、人類が再びある程度のレベルまで技術的に復活した後に、ようやく記録され始めている。そのときになってようやく、それまで口述で世代から世代へと受け継がれていた内容に基づき、象徴表現を使って過去の出来事を書き残すことができるようになったわけである。そこまで技術が復活するには、地殻変動から何千年も経る必要があったことだろう。地球に大惨事をもたらし、「黄金の時代」を終焉させた出来事の後に起きたことは、まさにそれだった。

発明・発見は全て再発明・再発見
原始人は天才だった証拠がなぜ次々と発見されているのか!?

主流の「科学」は、自らの現状を維持するために、否定したり無視しようとしているが、我々の目の前には、古代・前史世界に発達した知識があった証拠が突き付けられている。世界各地には、「原始」的な人々には建設できなかったはずの「謎」の建造物が存在する。現代の技術をもってしても、建設できないものもある。レバノンのベイルートの北東にあるパールベックには、それぞれ800トンの重量がある3つの巨大な石があり、この石は、少なくとも3分の1マイルを移動して、壁の高い位置に設置されている。何千年も前のことだ。すぐ近くには、ジャンボジェット3機分の重量に相当する1000トンの別の塊かたまりもある。

どうやったらこんなことができたのか？ 公式版の歴史では、この疑問を追求すると、とんでもない結論に行き着きかねないため、答を出したくない。ペルーには、440トンもの石で築かれた神殿などの遺跡がある。古代都市ティアワナコでは、1000トンのブロックが金属の留め具^{クランプ}で連結されている。約1万1000年前の遺跡だ。ペルーには、謎めいたナスカの線画もある。地表面を削って地下の白い部分を露出させることで線が形成されている。この手法で、動物、魚、昆虫、鳥を見事に描いている。

図画は、一筆書きのように一本の連続した線で描かれており、あまりにも巨大なため、1939年にこの付近を飛行機が行き交うようになって初めて全体像が判明したものもある。ペルーのリマ東北部のマルカウアシ台地への探検中に、1万年以上前の岩面彫刻が発見されている。動物や人物の彫像だが、その大半は、北極熊、セイウチ、アフリカのライオン、ペンギン、恐竜のステゴザウルスなど、現地に住むものではなかった。恐竜のことを科学が認識したのは1880年代であり、ステゴザウルスは1901年に発見されている。ナスカ、パールベック、ギザの大ピラミッドなど驚きの精密さと規模で作られた謎の人工物を可能にした知識は、黄金時代のアトランティス人とムー人のものであり、大洪水の後、後で述べることが、「選ばれた民」が握っていた。

これらの古代の構造物、神殿、ストーン・サークル、立石^{リツセキ}（メンヒル）は、太陽と月、一



図19 レバノンのパールベック。ジャンボジェット3機分の重量の石を使った工事を古代人が行っている。「原始人」にできることだろうか？ できみたいだ。

部の恒星系に合わせて正確に配置されていただけではなかった。地球全体で相互に精密な位置関係を保って配置されていたのである。建設の技術や設計は、世界各地で共通していることが多いが、それはずっと昔にさかのぼると、古代の世界は分断したり孤立していなかったからである。

1885年には、オーストラリアで、精密に機械加工され、成形された金属の立方体が石炭の塊かたまりの中から発見された。その石炭層の年代からして、30万年前に製作されたものと推定されている。1844年には、イングランドのラザフォードミルズで、8フィートの岩に埋め込まれた金糸が発見されている。この岩は、6000万年前のものと推定されている。古代エジプトの墳墓から電池が見つかっており、弾丸が撃ち込まれた前史時代の動物の骨も発見されている。かかヒールとの付いた現代的な靴の跡が、550万年前の鉱物層で見つかった。貝殻に彫刻された人間の顔が、200〜250万年前の赤い岩から発見されている。南アフリカでは、何百個もの完全な球形の金属が、30億年前の鉱物層から発掘されている。1億3500万年〜6500万年前の白亜紀の地層から、恐竜の残滓ざんしと一緒に人間をつくりの形をした足跡が発見されている。マイケル・A・クレモトリチャード・L・トンプソンの『禁じられた考古学 (Forbidden Archaeology)』などの優れた著作に、世界各地にあった高度な技術の事例が無数に収録されている。



図20 ペルーのナスカの地上絵。その全体像は飛行機から見なければ把握できない。

だが、どうして、こうした発見があるのに、公式版の「歴史」は書き換えられないのだろうか？ どうして学校で教えないのだろうか？ これまで20年間、私が明かしてきたように、主流の「科学」は、エリート血筋によって支配されており（特に研究資金の操作による）、真実を追求するのではなく、偽の歴史を普及させるために存在している。どうしてエリート家系がそうしたのかは後述する。地球と人類の歴史は、学校や大学で教えられ「事実」として受け入れられているものとは、まったく異なる。ムーの存在と歴史を専門に研究したジエイムズ・チャーチワード大佐は、こう述べている。

いくつもの文明が誕生・完成しては忘却されるという過程が、何度も繰り返されてきた。この地球上に新しいものなど、ありはしない。現在あるものは、過去にあったものだ。我々が学び、発見するものは、全て過去に存在していた。我々の発明・発見は、再発明・再発見に過ぎない。

古代の伝説に記された破滅により、技術が失われたため、再発見すべきことはたくさんあった。基本的には、人類は振り出しに戻ったわけである。フェルナンド・モンテシノス（南米の年代記を初めて整理したスペイン人の一人）が収集したインカ人の言い伝えによると、

インカ帝国は、地殻変動の前と後でそれぞれ別の帝国だったという。生活に必要な条件を備えた高い山（おそらく有名な「失われた都市」マチュピチュだろう）に避難して生き延びた人々は、アンデス山脈のクスコに戻り、再出発したと伝えられている。大洪水の前の時代の人々のほうが、その後の人々よりも技術的に高度であり、世代を重ねるごとに本来の知識は歪められていった。仕舞いには、記憶の大半は、世界中の神話と伝説の中にさまざまな表現で象徴化され組み込まれることで保持されるだけになった。

大洪水後の世界——全ての道はシユメールに通ず！

再浮上した高度文明の一つ

大洪水前の水準にはとうてい及ばないとはいえ、同時代の他の人類よりは遥かに進んだ新文明が登場するには何千年もの歳月が必要だった。

新文明が興ったのは、中米、南米のインカ文明（大洪水後の帝国）、西アフリカ、エジプト、シユメール、インダス川の低地、中国などである。一般の歴史家は、シユメール（聖書のシナールの地）が「文明の揺り籠」だとするが、実はそうではない。地殻変動で破壊された「黄金の時代」の後に、再浮上した大洪水後の高度文明の一つに過ぎない。とはいえ、シユメールは、人類の歴史にとって、非常に重要な意味を持っており、1990年3月に霊能

者と出会って以来、ありとあらゆる角度から「メソポタミアの地」の情報が私の関心圏に押し寄せてきた理由もそこにある。

シュメールの時代は、詳細についてはさまざまな見解があるものの、紀元前4000年から紀元前2000年の間の数千年に相当すると推定されており、その後、カルデア、アッシリア、バビロンなど他の人々が、シュメールの土地を引き継いでいった。シュメール人は、山岳地帯から、「肥沃な三日月地帯」(現在のイラク)に定住しにやってきましたが、アフリカを経由したという説もある。シュメール人は、大洪水後(ノアの洪水後)ホスト・デイルービアンに初めて都市に居住し、壁、道路、外洋航海の船を建造した人々だった。シュメール人は、どこからともなく、高度に発達した知識と洗練された技術を備えて登場したようである。今日の我々が当然と思っている「人類初」の100件以上が、6000年以上前のシュメールにある。天文学を始めたのもシュメール人であり、書き言葉を発達させ、裁判制度で法律を執行し、農業と畜産を始めたのもシュメール人である。一般には過去2000年間にようやく「発見」されたことになっていて、惑星の存在も知っていた。歴史では、古代エジプト、ローマ、ギリシャが当時としては相当進歩していたと喧伝けんでんされているが、これらの文明は、シュメールから受け継いだ知識に基づいており、後で説明するが、いわゆるシュメールの「神々」から受け継いだものである。



図22 大洪水の後に「突然」、高度に発達した3つの文明が出現した。シュメール（バビロン）、エジプト、インダス川の文明は、相互に密接につながっている。

いわゆるシュメール人の本当の起源は、何千年も前にさかのぼり、我々の「時間」感覚で何万年も続いた黄金の時代にある。シュメール人の歴史は、主に粘土板ククレットなど19世紀になってから発掘された史料に基づいて再構築されたものである。本書では、この粘土板のことを「シュメールの粘土板ククレット」と呼ぶことにする。2003年のイラク侵攻と組織的な博物館の収奪によって、こうした値段のつけない遺物が何千件も失われた。それがどれほど重大な意味を持っているかは、その内に分かることだろう。

紀元前1900年頃に最後の王朝が滅亡した後、シュメールの書記官は、メソポタミアに定住してシュメール人と呼ばれるようになった遙か前からの、深遠な歴史を編集した。後にバビロニア年代記となるこの書物には、彼らの王は24万年前にさかのぼると主張している。何があったのか理解するためには、洪水前の発達した社会の知識や人間の系統が、洪水後の発達した社会に受け継がれたことを押さえておく必要がある。地殻変動と長い回復期間を経て、本来の知識が希薄になっただけである。後述するが、他にも理由がある。突如として、高度に発達した文明が、エジプトとインダス川（現在のインド亜大陸）の各地に、ほぼ同時に出現した。通常の歴史認識と異なり、これらの文明は、初期段階においては、シュメールの支配と影響を受けた単一の帝国の一部だった。私は、その根拠を他の著作で示している。

同一の知識、異なる経路——未来などなく、あるのは今の瞬間の可能性

地殻変動までの地球社会は、共通の宗教と知識で成り立っていた。それが、大変動の後遺症により、複数の孤立した共同体に分かれてしまった。そして何千年も経る内に、本来の知識は希薄化し、歪められ、異なる形で表現されるようになった。それでも、各文化圏にある夥おびただしい数の神話、名称、儀式の関連性を調べれば、共通するテーマがあることが分かるだろう。ズールー族のシャーマン、クレド・ムトゥワが、私のために何度か「骨投げ」をしてくれたとき、私自身もそれに気付いた。クレドは、さまざまなシンボルに彫刻された動物の骨が入った籠かごを持っていて、それを床に投げ出し、それぞれの着地点の位置関係を見ることが、人の「未来」を読む。

ヨーロッパでも、ルーン文字の石を投げたり、タロット・カードを読み取ったりすることを思い出した。元は同じ知識で、手法が違うだけだ。この根底には、「全ては振動するエネルギーである」という共通の知識がある。前述の通り、物質は「固形」に見えるけれども、深いレベルでは、周波数の異なるエネルギーの振動である。人間の肉体、心マインド、感情も、この現実界にあるものは、例外なくそうである。

我々はまさに肉体コンピュータ④

テレビをアナログ放送からデジタル放送に切り替えると、デジタル式の人間の脳に大幅に接続しやすくなり、人間を操作する上で大きな意味があるのではないかと、私は何年も前から感じている。